

保存用

大学研究ノート

農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業
に関する意識の調査・研究

農業高校生の進路選択と農業に関する意識の
調査研究 ー普通高校生との比較ー

…………… 山 谷 洋 二

通 卷 15 号

1974年 6 月

広島大学大学教育研究センター

目 次

農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究	1
はじめに	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の方法	2
3. 入学生の状態	5
4. 学生の入学動機	8
5. 学生の農業に関する意識	16
6. 高等学校の農業科および水産科出身者の意識	20
ま と め	22
農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究	
— 普通高校生との比較 —	24
1. はじめに	24
2. 調査の方法	24
3. 高校生活	26
4. 大学への進学	28
5. 卒業後の進路	30
6. 農業に関する意識	31
7. ま と め	33

農学系大学・学部新入学生の 入学動機と農業に関する意識の調査・研究

A Survey on the Freshmen's Consciousness of Agricultural courses in Colleges and Universities Concerning their Entrance Motive and an Image of Agriculture.

山 谷 洋 二*

はじめに

この調査・研究は、昭和48年4月から5月にかけて、西日本地域の農学系大学・学部の新入学生全員を対象にして、学生の入学動機と農業に関する意識を調査、検討したものである。

昭和30年代後半からの所謂「経済の高度成長」の中で、日本の農業は多くの問題をかゝえている。このことは農学系学部学生の入学動機と農業に関する意識にも当然影響を与えずにはおかないし、又毎年数千人をこえる入学生を受入れ、日常的に農学系学生の教育に携わっているわれわれ教師にとっても少なからぬ困難をもたらしている。一方近年、大学進学率の急激な上昇による大学の大衆化と、旧来の学問分野相互の間の閉鎖性に対する反省とから、多くの大学で教育組織やカリキュラムの改革の試みがなされている。この報告がそうした試みを行なう上で役立つことがあれば幸いであると考えている。

本調査の実施にあたって、調査対象大学・学部の諸先生、調査に心よく応じてくれた学生諸君に一方ならぬお世話になった。この機会に深く感謝の意を表します。最後に、この調査・研究は広島大学・大学教育研究センターの「理科系学部学生のための一般教育および基礎教育に関する研究」プロジェクトの一環として行なったものである。センターその他多くの諸先生より御教示や助言をいただいた。心から感謝します。

1. 調査の目的

毎年数千人をこえる若者が農学系の大学・学部に入學し、ほぼ同数の卒業生が新しい労働力として社会へ巣立ってゆく。大学で受ける教育と学生が将来実際に携わる仕事との関連の有無・深淺は、彼等を受入れる社会にとっても、学生自身にとっても重大な問題である。社会のさまざまな分野で働く卒業生にとって、大学で身につけた「一般教育」の内容や、専門の学問や技術が本当に役に立っているのかどうか。一口に、「大学は幅広くかつ高度の教養をそなえ、専門の分野での仕事を効果的・創造的に行ないうる資質や能力をもつ人材を育成する」というが、かゝる資質とか能力の実体はどんなものなのだろうか。大学で教育に携わっているわれわれ教師にとって等閑視できない問題が山積している。

昭和30年代後半からの所謂「経済の高度成長」の中で、工業偏重と農業軽視の政策の反映として、農業と農学教育に対する一般的関心の低下は、農学系学部学生の勉学意欲に少なからぬ影響を及ぼしており、農学教育に携わるわれわれ教師にとっても重大な問題となりつゝある。米作偏重に

※広島大学水畜産学部・広島大学大学教育研究センター併任研究員

よる「米の過剰」と減反政策，外国農産物の無秩序な輸入増加は，農民の生産意欲を減退させ，農家の経営と農村社会そのものまでも崩壊に導き，食糧自給率の極端な低下を招来している。一方都市の消費者は高い食料品物価に悩まされ，PCBやカドミウムなどを含む有害食品のはんらんを脅やかされている。

こういう中で学生はどういう動機で農学系学部に入學し，何を考え，何を大学に期待しているのだろうか。大学の教育が本当の意味で社会的要請に答えているかという観点からみて，農学系学部学生に対する教育が，変化しつつ，かつ増大しつつある社会的な要請に果して見合っているだろうか，専門的な教育が効果的に行なわれているかどうかを検討してみる必要がある。農業の生産構造と内容の変化，農業関連産業の発展，そして何よりも社会の真の要請に見合った農学教育をどのようなものとして観念し，現状をどう改革し新しく組立てゆくかを一般教育，専門基礎教育，専門教育のいずれの側面からも検討してゆかなくてはならない。

この調査は以上の諸問題を解決してゆく糸口の一つとして，農学系大学・学部の入學当初の学生について，進路決定の状況，大学への期待，日本の農業に関する意識を把握しようとして行ったものである。

2. 調査の方法

2-1. 調査時期 昭和48年4月～5月の2ヶ月間

2-2. 調査対象と調査の実施 著者の勤務地の関係から調査対象を名古屋以西の西日本地域の4年制の国公立の農学系大学・学部（琉球大学を除く）の新入学生全員に限定した。対照として東日本地域の一大学（帯広畜産大学）についても同様の調査を行なった。調査方法は別掲（2-4）の調査票を著者が調査対象大学・学部を持ってゆき，趣旨を説明した後，その大学の教官の協力をえて対象学生に調査票の記入をさせた。種々の事情で調査の行なえなかった4大学・学部（三重大農，京都大農，島根大農，岡山大農）を除いて，調査を行ったのは表2-1に示す19の大学・学部

表2-1 調査した大学・学部の学科構成

大学・学部	学 科 系 列							
	農 学	林 学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農 業 経 済 学	水産学
帯広畜産大	草地学		農産化学	農業工学	酪農学	獣医学	畜産経営学	
名古屋大農	農 学	林 学	農芸化学		畜産学			
岐阜大農	農 学	林産学	食品工業化学					
三重大水産		林 学	農芸化学	農業工学	家禽畜産学	獣医学		海洋生産系 水産増殖系 水産食糧系
京都府立大農	農 学	林 学	農芸化学					
大阪府立大農	園芸農学		農芸化学	農業工学		獣医学		
神戸大農	園芸農学		農芸化学	農業工業生産工学	畜産学			
鳥取大農	植物防疫学 農学	林 学	農芸化学	農業工学		獣医学	農業経営学	

広島大水畜産			食品工業化学 農芸化学		畜産学		水産学
山口大農	農学					獣医学	
香川大農	農学		農芸化学	農業工学			
	園芸学		食品学				
愛媛大農	農学	林学	農芸化学	農業工学			経営農学
高知大農	暖地農学	林学	農芸化学	農業工学			栽培漁業学
九州大農	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学		水産学
		林産学	食糧化学工学				
長崎大水産							海洋開発系 海洋生産系 食糧科学系
佐賀大農	農学		農芸化学	農業工木学			
	園芸学						
宮崎大農	農学	林学	農業化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産増殖学
	草地学						
鹿児島大農	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	
	園芸学						
鹿児島大水産							漁業学 水産製造学 水産増殖学

である。これらの大学・学部の学科構成も併せて示してある。多少の問題点もあるが、以下の考察では類縁学科を一括した学科系列を学科として表現してある。九州大学農学部と帯広畜産大学の分については調査対象学生の学科分類は行なわれていない。

2-3 調査票の回収状況 調査票の回収率は表2-2に示した通りであって、大学・学部によっては幾分低い所もあったが、全体では約80%であった。

表2-2 調査票の回収状況

大学・学部	入学者数	調査票		大学・学部	入学者数	調査票	
		回収数	回収率			回収数	回収率
帯広畜産大	172人	138枚	80%	愛媛大農	137人	133枚	97%
名古屋大農	149	113	76	高知大農	147	130	88
岐阜大農	199	170	85	九州大農	223	129	58
三重大水産	61	40	66	長崎大水産	111	90	81
京都府立大農	102	71	70	佐賀大農	132	89	67
大阪府立大農	161	140	87	宮崎大農	246	182	74
神戸大農	145	128	88	鹿児島大農	213	171	80
鳥取大農	228	192	84	鹿児島大水産	140	134	96
広島大水畜産	84	79	94	西日本(除帯広)計	2750	2162	79
山口大農	99	65	66	合計	2922	2300	79
香川大農	173	104	60				

2-4 調査票 用いた調査票を下に示した。

調査票

農学系学部新入生の意識調査

昭和48年4月

この調査は農学系学部の新入生諸君の意識の実態を把握して、今後の教育の改善のために行なうものです。調査の結果は、この目的以外に利用することはありません。個人の秘密は厳守されますから、正直にありのままを回答して下さい。諸君の御協力をおねがいます。

該当の数字を一つえらんで○でかこみ、()の中には必要な事項を記入して下さい。

1. 氏名 () 1. 男性 2. 女性
2. 学科 ()
3. 出身地の住所 (県(府) 市(郡) 町(村))
4. 出身地の種別 1. 都市部 2. 農漁村部
5. 家の職業 ()
6. 出身高校の種別 1. 普通科 2. 農業科 3. 水産科 4. 工業科 5. 商業科
6. その他 ()
7. 現在の専攻をえらんだ主な理由はどれですか (2つ以上あげてもよい)
 1. 農業がすき 2. 水産業がすき 3. 生物がすき 4. 入学しやすい 5. 通学に都合がよい
 6. 先生や親のすすめ 7. 先輩・知人がいた 8. 二次志望で廻された 9. その他 ()
8. 本当に入学したいと思っていた専攻はどれですか (実際に受験しなかったものも含む)
 1. 農林学系 2. 水産 3. 理学 (生物系) 4. 理学 (生物系以外) 5. 獣医
 6. 商船 7. 工学 8. 医学 9. 歯学 10. 薬学 11. 教育 12. その他 ()
9. あなたの将来の志望は何ですか
 1. 農林業関係 2. 漁業関係 3. 食品の製造加工 4. 公務員 5. 教員 6. 研究
 7. 工業 8. 商業 9. 医師 10. 獣医師 11. その他 () 12. わからない
10. 現在の専攻はあなたの将来の志望にかなっていますか
 1. かなっている 2. 志望に合わない 3. わからない
11. 若し可能なら、これからも他の専攻に移る意志がありますか
 1. 他へ移りたい 2. 移る気はない 3. わからない
12. この大学に何を期待していますか、一番ぴったりするものを一つ選んで下さい
 1. 専門的な学問・技術を身につける 2. 教養を高め人間的に成長する
 3. 教師や友人との人間的接触をうる 4. 大学生活をエンジョイする
 5. その他 ()
13. 卒業後大学院へ進学 of 希望がありますか
 1. 進学 of 希望がある 2. ない 3. わからない
14. 次の科目の内、高校ですきだった科目は (2つ以上あげてもよい)

1. 生物 2. 化学 3. 物理 4. 地学 5. 数学 6. 国語 7. 英語 8. 社会
15. 高校できらいだった科目は(2つ以上あげてもよい)
1. 生物 2. 化学 3. 物理 4. 地学 5. 数学 6. 国語 7. 英語 8. 社会
16. 農業に対してどういうイメージをもっていますか(2つ以上あげてもよい)
1. やり甲斐がある 2. きたない 3. つらい 4. 男らしい 5. 大学を出なくてもやれる
6. 大切だ 7. とくはない 8. その他()
17. 日本の農業の将来についてどう思いますか
1. 将来性がない 2. 発展してゆく 3. わからない
18. 日本は土地がせませく、外国に安い食料が沢山あるから、日本で農業をやる必要がないという人がいますが、あなたはどのように考えますか
1. その通り 2. そうは思わない 3. わかからない
19. 農業や水産業の大切な役割のうちで、あなたの関心の強い分野はどれですか(2つ以上あげてもよい)
1. 食料の生産と供給 2. 公害の防止など自然環境の保全
3. 生活物資(煙草・木材・羊毛・香料など)の生産 4. その他()

以上

御協力ありがとうございました。

2-5 結果の分析 調査票は大学・学科別に集計して、学生の出身家庭の職業別、所属学科別、出身高校の種類別に結果の分析、検討を行なった。

3. 入学生の状態

3-1 学生の出身地域および家の職業 大学・学部別に学生の出身地域および家の職業の分布の状況を表3-1に示した。西日本地域全体の農学系学部学生のうち、農漁村部の出身者は39%、都市部の出身者は61%、家の職業を農漁業とする者は22%、その他が78%であった。東日本の帯

表3-1 各大学・学部学生の出身地域および家の職業の分布

大学・学部	出身地		家の職業	
	農漁村部	都市部	農漁業	その他
帯広畜産大	38%	62%	25%	75%
名古屋大農	36	64	23	77
岐阜大農	38	62	25	75
三重大水産	28	72	3	97
京都府立大農	27	73	18	82
大阪府立大農	22	78	41	86
神戸大農	14	86	7	93
鳥取大農	50	50	30	70
広島大水畜産	42	58	19	81
山口大農	26	74	8	92
香川大農	46	54	30	70
愛媛大農	48	52	28	72
高知大農	47	53	32	68
九州大農	31	69	12	88

大学・学部	出身地		家の職業	
	農漁村部	都市部	農漁業	その他
長崎大水産	40	60	22	78
佐賀大農	53	47	35	65
宮崎大農	56	44	36	64
鹿児島大農	42	58	20	80
鹿児島大水産	30	70	7	93
西日本(除帯広)計	39%	61%	22%	78%
合計	39%	61%	22%	78%

広畜産大学の学生についてもほぼ同じ値がえられているから、農学系学部への進学者の中に占める農漁村地域からの出身者の比率は全国的にみて約4割、家の職業を農漁業（この調査では専業、兼業の別が明らかではないが）とする者の比率は約2割であると思われる。

こゝ10数年におよぶ経済の高度成長、工業偏重と農業軽視の政策の中で、人口の都市への集中が著しく、農家戸数も昭和35年の600万戸から昭和48年の500万戸に、農業就業人口（兼業を含む）も昭和35年の1500万人から昭和48年の700万人に激減し、総就業人口に占める農業就業人口の割合は13%にまで低下している。われわれは農学系学部への入学者の過半数が都市部の出身者であり、大半のものの家の職業が農漁業以外であることを念頭において農学教育を考えてゆかなければならない。

比較的農漁村部の出身者が多く、家の職業を農漁業とする者の割合も多い大学、学部を農村型、比較的都市部の出身者が多く、家の職業が農漁業の他とする者の割合の多い大学・学部を都市型とすれば、農村型に入るのは鳥取大農、愛媛大農、高知大農、佐賀大農、宮崎大農の5学部、都市型に入るのは三重大水産、京都府立大農、大阪府立大農、神戸大農、山口大農、九州大農、の6学部となる。

次に、各学科別に学生の出身地域および家の職業の分布をみると（表3-2）、農村型の学科は農学科、農業工学科、農業経済学科であり、都市型の学科は農芸化学科、獣医学科、水産学科であり、林学科と畜産学科はこれらの中間になる。

表3-2 各学科別の学生の出身地域および家の職業の分布

学 科	アンケート 回収数	出 身 地		家 の 職 業	
		農 漁 村 部	都 市 部	農 漁 業	そ の 他
農 学 科	4 6 4 人	4 3 %	5 7 %	2 9 %	7 1 %
林 学 科	2 0 2	3 5	6 5	2 0	8 0
農 芸 化 学 科	4 1 9	3 4	6 6	1 9	8 1
農 業 工 学 科	2 7 6	5 0	5 0	3 2	6 8
畜 産 学 科	1 3 1	4 0	6 0	2 2	7 8
獣 医 学 科	1 5 5	3 1	6 9	1 6	8 4
農 業 経 済 学 科	4 8	7 3	2 7	4 8	5 2
水 産 学 科	3 3 6	3 4	6 6	1 3	8 7
帯 広 大・九 大 農	2 6 9	3 5	6 5	1 9	8 1
合 計	2,3 0 0 人	3 9 %	6 1 %	2 2 %	7 8 %

表3-3 学生の性別の分布

学 科	性 別		学 科	性 別	
	男 性	女 性		男 性	女 性
農 学 科	84%	16%	獣 医 学 科	74%	26%
林 学 科	100	0	農 業 経 済 学 科	87	13
農 芸 化 学 科	73	27	水 産 学 科	99	1
農 業 工 学 科	99	1	帯 広 大・九 大 農	89	11
畜 産 学 科	90	10	合 計	88%	12%

3-2 各学科学生の特長 表3-3は各学科別に学生の性別の分布を示したものである。農芸化学科と獣医学科では女子学生の割合が25%をこえる一方、林学科、農業工学科、水産学科では女子学生は殆んどいない。農学科、畜産学科、農業経済学科はこれらの中間である。

表3-4、表3-5は各学科別に学生の高校当時の科目に対する好き嫌いの状況を示したものである。農学系学部の学生を全体的にみると好きな科目としてあげられたのは生物、化学、数学、社

表3-4 学生が高校当時に好きだった科目の分布 (%)

学 科	生 物	化 学	物 理	地 学	数 学	国 語	英 語	社 会
農 学 科	40	39	21	9	34	17	17	38
林 学 科	32	36	29	15	38	16	18	43
農芸化学科	34	65	22	8	38	11	16	28
農業工学科	14	35	42	9	50	10	19	35
畜産学科	39	38	21	5	35	14	23	29
獣医学科	55	37	21	11	34	23	25	30
農業経済学科	26	28	21	6	43	9	26	45
水産学科	47	40	25	14	33	13	25	40
学部全体	37	43	25	10	37	15	21	36

表3-5 学生が高校当時に嫌いだった科目の分布 (%)

学 科	生 物	化 学	物 理	地 学	数 学	国 語	英 語	社 会
農 学 科	7	12	36	15	19	27	41	13
林 学 科	13	17	29	9	20	38	44	11
農芸化学科	6	2	30	14	15	37	44	19
農業工学科	16	17	17	15	11	43	44	19
畜産学科	5	12	40	16	22	30	45	16
獣医学科	3	15	34	17	21	25	31	17
農業経済学科	9	21	34	11	9	34	40	15
水産学科	6	12	30	15	25	34	37	13
学部全体	9	12	31	15	19	33	39	15

会であり、嫌いな科目としては、物理、国語、英語があげられたが、当然のことながら学科毎に大きな相違があった。特に目立つのは、農芸化学科の学生の化学、農業工学科の学生の物理と数学、獣医学科の学生の生物、農業経済学科の学生の数学と社会、水産学科の学生の生物に対する親近感である。農学系学部の学生が全体として生物、化学、数学、社会に関心が強いことは、広義の農学が生物の生産と、その生産物の人類への利用を目的としていて、社会との関連の深いことから当然のことであるが、上述の農学の目的からしても地学、国語、物理、英語の学力を十分伸ばす方向の教育を入学後に配慮する必要がある。学科毎の学生の関心の相違は、学部全体を通じた共通基礎的な教科目を実施するさいに念頭におかなくてはならない事柄である。

3-3 学生の出身高校の種類 表3-6は本年度入学生の出身高校の種類を示したものである。普通科（理数科を含む）以外の高校の出身者は非常に少ない。特に農業科、水産科出身の学生

表3-6 学生の出身高校の種類

学 科	出 身 高 校 の 種 類				
	普通科	農業科	水産科	工業科	その他
農 学 科	450人	10人	一人	4人	一人
林 学 科	201	—	—	1	—
農芸化学科	418	—	—	1	—
農業工学科	271	1	—	4	—
畜産学科	130	—	—	1	—
獣医学科	152	—	—	2	1
農業経済学科	45	2	—	1	—
水産学科	315	—	15	5	1
帯広大・九大農	257	10	—	1	1
合 計	2239	23	15	20	3

が非常に少なく、表にあらわれている人数の殆んどは推薦入学の学生である。必要以上の小課程制をとり基礎的学力への配慮の足りない現行の職業高校の制度と、大学入試のあり方が変わらない限り、この傾向は今後も続くものと考えられる。昭和48年度の段階で推薦入学の制度をとっているのは西日本地域では表3-7に示す5大学・学部（高知大農学部暖地農学科では昭和49年度入試から

表3-7 西日本地域で推薦入学制度を採用している農学系の学部・学科

大学・学部	対 象 学 科	推 薦 依 頼 先	推 薦 入 学 人 員
鳥取大農	農 学 科	制 限 な し	定員の 10%
	農 業 経 営 学 科		" 20%
岡山大農	農学科・園芸学科	制 限 な し	" 20%
	畜 産 学 科		" 20%
香川大農	農学科・園芸学科	農業関係の学科をもつ高校	
島根大農	農学科・林学科	農業高,工業高,普通高	" 10%
長崎大水産	全 体	水 産 高	" 10%

採用)である。多くの大学では公平で適切な選抜方法がむつかしく、入学後の学力などの問題もあるので、この制度を採用するに至っていない。

4. 学生の入学動機

4-1 第一志望の学部 農学系学部の学生が入学前に第一志望としていた学部、専攻の分布を

表4-1に示した。西日本全体でみると、広義の農学系に含まれる農林学系、水産学、獣医学を第一志望とした者はそれぞれ22%、9%、9%であって合計40%にしかない。一方18%の者が理学部を、20%の者が工学部を、13%の者が医歯薬学系を第一志望にしている。農学系学部の学生の

表4-1 農学系学部の学生が入学前に第一志望としていた学部・専攻

第一志望の 学部・専攻	西 日 本			帯 広 大		
	家 の 職 業 別			家 の 職 業 別		
	農 漁 業	そ の 他	全 体	農 漁 業	そ の 他	全 体
農 林 学 系	30%	20%	22%	36%	24%	27%
水 産 学	5	10	9	0	4	4
理 学 (生物系)	6	10	9	13	13	12
理 学 (生物系以外)	7	9	9	10	4	5
獣 医 学	10	9	9	23	25	26
商 船	3	2	2	0	2	1
工 学	23	19	20	3	4	4
医 学・歯 学	5	9	8	3	10	9
薬 学	5	5	5	0	2	1
教 育 学	1	1	1	3	0	1
法 学・経 済 学	2	1	1	0	1	1
そ の 他	2	3	3	7	4	4
無 回 答	1	3	3	3	7	6
合 計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

過半数は自分の意志に反して農学系学部に入學していることを示している。学生の家の職業別にみると、農漁業の者はその他の者よりも農林学系を第一志望とする者が10%多く、その他の職業の者では理学部と医歯薬学系を第一志望とする者が農漁業の者の約1.5倍になっている。東日本の対照校としてあげた帯広大では、農林学系と獣医学を第一志望とする者がいずれも25%をこえていて、この大学は学科構成に若干の特殊な点もあるが、西日本地域の学生に較べて高率の農学志向性を示している。工学部を第一志望とする者が4%と低率なのもこの大学の長である。

次に学生の第一志望とした学部・専攻を学科別の学生についてみると、表4-2に示すようにかなりの相違が認められた。各学科別に学生の特長をみると、農学科では農林学系を第一志望とする者が最も多く37%である。林学科では農林学系志望が32%、工学部志望が24%である。農芸化学科

表4-2 学科別学生が入学前に第一志望としていた学部・専攻

学 科	農 学	林 学	農芸化学	農業工学	畜 産 学	獣 医 学	農業経済学	水 産 学
農 林 学 系	37%	32%	21%	16%	29%	1%	16%	4%
水 産 学	3	4	1	1	5	0	0	49
理 学 (生物系)	13	5	13	1	7	7	6	13

理 学 (生物系以外)	7	10	16	8	2	3	11	4
獣 医 学	7	4	2	3	30	57	9	3
商 船	1	3	1	3	1	1	0	8
工 学	13	24	15	55	15	4	16	11
医学・歯学	6	11	10	4	5	17	4	5
薬 学	4	1	13	2	2	5	6	1
教 育 学	2	1	1	0	1	0	4	0
法学・経済学	2	2	1	1	0	0	16	0
そ の 他	3	3	2	3	2	1	11	2
無 回 答	3	1	5	3	2	5	2	1
合 計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

では農林学系志望が21%，理学部志望が29%，医歯薬学系志望が23%である。農業工学科では工学部志望が過半数をこえ55%に達する。畜産学科では農林学系志望と獣医学志望がそれぞれ29%と30%ではほぼ等しい。獣医学科では獣医学志望が57%に達し、医歯薬学系志望の22%を除けば過半数が自己の志望の専攻に入学している。農業経済学科では法学・経済学部志望が16%を占める。水産学科では水産学志望が49%を占め、約半数が自己の志望の専攻に入学している。

4-2. 現在の学部・学科を選んだ理由、農学系の学生が現在の学部、学科を選んだ理由を示すと表4-3のようになる。まず農学系学部を自からの積極的希望によって入学して来る者は、「農業がすき」の18%，「水産業がすき」の7%，それに「その他」の内の約半分8%を加えて合計33%，全体の1/3である。「生物がすき」を理由とする者が36%に達する。選択肢にはなかったが、

表4-3 農学系学生が現在の学部・学科を選んだ理由 (%)

理 由	西 日 本			帯 広 大		
	家 の 職 業			家 の 職 業		
	農漁業	その他	全 体	農漁業	その他	全 体
農 業 が す き	29	15	18	50	36	39
水 産 業 が す き	6	7	7	0	0	0
生 物 が す き	26	38	36	20	49	43
先生や親のすすめ	17	14	14	17	6	9
先輩・知人がいた	4	3	3	10	1	3
通学に都合がよい	8	9	9	13	5	7
入学しやすい	35	33	34	20	26	25
二次志望で廻された	11	11	11	13	24	21
そ の 他	12	17	16	10	13	14
(内) 化学がすき	1	2	2	0	1	1
将来性のある職業	5	4	4	7	5	6
自然がすき	1	1	1	0	1	1
海がすき	0	1	1	0	0	0
無 回 答	0	1	1	0	0	0

「その他」の中で「自然に対する親近感」と広範な分野にわたる卒業後の職業の将来性と自分の適性との関連を理由にあげた者が少なくなかった。又、「農学部即ち農業学部ではない」という記述もみられた。これは今後の農学教育を考える場合に充分検討すべきことであるが、一方農業軽視という現今の風潮に迎合する危険な問題も孕んでいるといえよう。

他方「入学しやすい」とか「二次志望である」ことを理由とする者が45%を占め、「先生や親のすすめ」を理由とする者14%の内の幾分かを含めて、約半数の者が自己の適性や好みを二の次にして高校時代の成績や学力を理由に進路を決定していることがうかがわれる。このことは日本の農業の不正常的な現状が強く高校生の意識を支配していると考えられるが、同じ理由で高校教師の進路指導のあり方にも大きな問題があると思われる。

対照とした帯広大では「農業がすき」や「生物がすき」を理由とする者の率が西日本地域の学生に較べて高いが、「入学しやすい」や「第二志望である」ことを理由とする者が46%もあり、西日本と同様の傾向を示している。

学生の家の職業別にみると、西日本地域でも帯広大でも、農漁業の者の方がその他の者より「農業がすき」を理由にあげる者の率が高い。

次に学科別に学生の進路決定の理由をみると、表4-4に示すように学科によってかなりの違いが認められた。「農業がすき」を理由とする者の比率の高いのは農学科、畜産学科、農業経済学科

表4-4 各学科の学生が現在の専攻を選んだ理由

学 科	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農業経済学	水産学
農業がすき	31	20	13	20	28	10	28	1
水産業がすき	1	1	0	0	1	0	0	42
生物がすき	40	21	35	6	46	76	15	47
先生や親のすすめ	11	15	18	21	7	6	23	9
先輩・知人がいた	2	4	3	5	4	3	4	1
通学に都合がよい	6	7	14	12	9	7	15	4
入学しやすい	31	38	32	55	27	15	49	25
二次志望で廻された	15	17	4	12	27	2	28	9
その他	10	17	28	17	4	15	6	15
(内) 化学がすき	0	0	10	0	0	1	0	1
将来性のある職業	3	1	8	7	1	5	4	3
自然がすき	1	6	0	1	1	1	0	1
海がすき	0	0	0	0	0	0	0	5
無 回 答	1	1	1	1	0	0	0	1

の学生でいづれも約30%である。水産学科の学生は42%が「水産業がすき」を理由にあげている。

「生物がすき」を理由とする者は、獣医学科の学生の76%を最高に、水産学科が47%、畜産学科が46%、農学科が40%、農芸化学科が35%といづれも高率である。

その他の理由を記述しているものゝ内、農芸化学科の学生では「化学がすき」や「職業の将来性や魅力」を理由とする者が多く、農業工学科と獣医学科の学生でも「職業の魅力」を理由にあげて

いる者が多い。更に林学科の学生は「自然がすき」とか「山がすき」を、水産学科の学生は「海がすき」を理由にあげている。これらは始めから選択肢に上ってればもっと高率になっているものと考えられる。

一方「入学しやすい」とか「第二志望」を理由とする者は、農業経済学科の学生で最も多く77%に達し、ついで農業工学科の67%、林学科の55%、畜産学科の54%が高い率を示している。

その他の理由の中には更に、「工業に魅力がない」ことを理由にあげる者が少なくなく、高度経済成長の中での公害などの歪が高校生の意識に反映しているものと考えられる。「人間の多い所がきらい」、「変わったことがしたい」、「理想や夢の実現」、「サラリーマンがきらい」、「のんびりしたい」などを理由としてあげている者もこの系列に属するものとみなしてよからう。更に「家が農家だから」、「公務員になるのに都合がよい」、「作ることがすき」などが理由にあげられている。最後に「北海道、四国、京都など大学の所在地に対するあこがれ」を理由にしている者もある。

4-3 将来の進路希望 農学系学生の卒業後の進路希望を示したのが表4-5である。西日本地域全体では「研究」を将来の職業として希望する者が22%と最も多く、公務員志望が18%、農林業関係が17%と続いている。「わからない」が17%もあることは、農学系学部への入学生のかかり

表4-5 農学系学生の卒業後の進路希望

将来の進路	西 日 本			帯 広 大		
	家 の 職 業			家 の 職 業		
	農漁業	その他	全 体	農漁業	その他	全 体
農林業関係	26%	15%	17%	63%	25%	34%
漁業関係	4	4	4	0	0	0
食品の製造加工	5	7	7	0	7	5
公務員	20	18	18	11	14	13
教 員	3	2	2	3	4	4
研 究	17	23	22	3	13	11
工 業	6	4	5	0	2	1
商 業	0	1	0	0	1	1
医 師	0	1	1	0	1	1
獣医師	4	6	6	9	20	17
その他	1	2	2	3	0	1
わからない	14	17	17	6	11	10
無回答	0	0	0	3	3	3
合 計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

の部分で確乎とした目標をもたずに入学していることになり注目される。帯広大では学科構成に若干の特殊な点もあるが、農林業関係の志望者が34%、獣医師志望が17%と目立っている。公務員志望も13%と高率である。

家の職業が農漁業の者はその他の者に較べて農林業関係の志望者が高率を示した。帯広大では、家の職業を農漁業とする者の内63%が農林業関係志望である。これは北海道という特殊な条件の下

での値と考えられる。

次に学科別の学生について卒業後の進路希望を示したのが表4-6である。農学科の学生では農林業関係志望の者が最も多く32%、次いで公務員20%、研究20%となっている。その他教員や食品製造・加工の他、園芸・造園、植物園、検疫、品種改良、昆虫の研究などの志望がみられる。林学科の学生では農林業関係志望の34%、公務員の25%が高率であり、これに研究の10%が次いでいる。

表4-6 学科別学生の卒業後の進路希望

将来の進路	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農業経済学	水産学
農林業関係	32%	34%	8%	21%	25%	5%	25%	0%
漁業関係	0	0	0	0	2	0	0	23
食品の製造加工	2	0	19	1	6	0	0	7
公務員	20	25	16	26	15	5	26	15
教員	4	1	1	2	2	1	4	1
研究	20	10	32	8	14	15	10	35
工業	1	4	2	20	2	0	6	1
商業	0	0	0	1	1	0	0	1
医師	2	1	2	0	1	1	2	1
獣医師	2	0	0	0	13	62	0	0
その他	3	2	2	1	2	1	6	3
わからない	15	23	18	20	16	8	22	14
無回答	0	0	0	0	1	2	0	0
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

農芸化学科の学生では研究志望の32%が最高で、これに食品の製造・加工の19%、公務員の16%がつづく。その他農林業関係の8%の他に、食品衛生関係、微生物関係、醸造、製薬などを志望している。農業工学科の学生では公務員志望の26%を最高に、農林業関係の21%、工業の20%がつづく。その他研究の8%の他に土地造成、農地の開発などを志望している。畜産学科の学生では農林業関係志望の25%を最高に、公務員の15%、研究の14%、獣医師の13%、食品の製造・加工の6%がこれにつづく。その他サラブレッドの生産を志望するものもある。獣医学科の学生では獣医師志望が62%と圧倒的に高率で、研究の15%がこれにつづく。農業経済学科の学生では公務員と農林業関係志望が高率でそれぞれ26%と25%を示し、これに研究の10%がつづく。水産学科の学生では研究志望が35%と高率を示し、これに漁業関係の23%、公務員の15%、食品の製造・加工の7%がつづいている。

獣医学科を除けば、どの学科の学生も約20%の者が将来の進路希望を「わからない」と答えているのは、入学当初という時点ではある意味では当然と考えられるが問題を含んでいるといえよう。その他、公害とか環境保全・保護関係の仕事につきたいとか、資源や生態系に関係する仕事をしたいとするものが全学科にみられた。一方農学科や農業工学科などの学生を中心に平和部隊などの海外技術指導や砂漠の開拓などを志望するものがある。又将来とも職業につきたくないとするものも数名あった。以上にみられる様に農学系学部学生の将来の希望する職業分野は極めて広範であり、

又、「考える自由な時間をもつ」とか「自分を見つめ、自分の人生をつかむ」,「人間としての生き方、生活の仕方を学ぶ」,「図書館を利用する」,「サークルやクラブの活動をする」ことを大学に入る目的としている者もある。これらは農学系学生のみでなく現代の学生一般の一側面を示しているものとみなされる。農学系学生で特長的なのは、「自然に親しむ」とか「自然と人間の関係を考える」ことを大学に入る目的としている者の少なくないことである。

4-6 大学院への進学希望 農学系学部の入学当初の学生に対して大学院への進学希望の有無を示したのが表4-12である。西日本全体では大学院へ進学を希望する者は41%,進学希望のない者が22%であり、前者は後者の約2倍である。「まだわからない」とする者は37%である。帯広大

表4-12 大学院への進学希望

進学希望	西日本		
	帯広大	名大	九大
進学の希望がある	41%	36%	47%
“ “ ない	22	32	20
わからない	37	29	33
無回答	0	3	0
合計	100%	100%	100%

では若干進学希望者が少なく36%である。国立大学の内で大学院の博士課程をもつ名大、九大の二大学の学生については大学院への進学希望者が47%の高率である。

学科別の学生について大学院への進学希望の有無をみると(表4-13),進学希望者の特に多いのは水産学科と獣医学科の学生であり、いずれも過半数が大学院への進学希望している。一方大学院への進学希望がないとする者は農業工学科,農業経済学科,畜産学科,農学科の学生に多く26%~30%である。

表4-13 学科別にみた学生の大学院への進学希望の有無

進学希望	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農業経済学	水産学
進学の希望がある	36%	40%	40%	24%	39%	50%	30%	52%
“ “ ない	26	18	23	30	27	15	30	15
わからない	38	42	36	48	34	34	36	33
無回答	0	0	0	0	0	1	4	1
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

5, 学生の農業に関する意識

5-1 農業に対するイメージ 農学系学部の新入学生の農業に対するイメージを示したのが表5-1である。農業を「大切だ」とする者が半数の55%,「やり甲斐がある」とする者が26%に達している。一方「つらい」とする者が12%,「大学を出なくてもできる」とする者が8%いる。農業に対するイメージは特にないとする者が23%もあることは問題である。家の職業が農漁業の者ではその他の者にくらべて、農業を「つらい」とする者の率が2倍である。帯広大の学生では農業を

表5-1 農学系学生の農業に対するイメージ

農業に対するイメージ	西日本			帯広大		
	家の職業			家の職業		
	農漁業	その他	全体	農漁業	その他	全体
大切だ	56%	55%	55%	48%	55%	53%
やり甲斐がある	29	25	26	41	38	39
男らしい	4	3	3	3	5	4
大学を出なくてもやれる	11	8	8	10	5	6
つらい	18	10	12	28	32	31
きたない	2	1	1	3	3	3
とくにない	18	24	23	14	13	13
その他	2	3	3	0	6	4
無回答	0	1	0	0	0	0

「大切だ」とする者が約半数の53%だが、「やり甲斐がある」とする者は39%もあり、西日本地域の学生より高率である。一方「つらい」とする者も31%と高率である。

農業に対するイメージを学科別の学生についてみると（表5-2）、農業工学科と水産学科の学生では農業を「大切だ」とする者の率がやゝ低い。「やり甲斐がある」とする者の比率の高いのは農学科、畜産学科、獣医学科の学生である。獣医学科と農業経済学科の学生では「つらい」とする者の率が比較的によく高いずれも17%を占める。

次に農業に対するイメージとして選択肢にあげた以外のもので自由に記述されているものをみる

表5-2 各学科別の学生の農業に対するイメージ

農業に対するイメージ	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農業経済学	水産学
大切だ	58%	55%	60%	48%	59%	58%	57%	49%
やり甲斐がある	32	24	20	22	30	29	21	24
男らしい	2	5	2	6	5	5	0	3
大学を出なくてもやれる	8	7	5	12	10	9	13	10
つらい	11	10	12	13	12	17	17	12
きたない	1	2	2	1	1	1	2	2
とくにない	20	23	24	29	16	17	21	27
その他	2	4	2	1	5	2	2	3
無回答	0	0	1	0	1	1	0	0

と積極的なイメージと消極的なイメージの2つに大きく分類される。積極的なイメージとしては、(1) 農業を人間らしい仕事であるとするもの、(2) 農業から自然との触れ合いを感じるもの、(3) 農業に対して明るく楽しい感じをもつものの3つがある。(1) に属するものとしては、「人間の回復」、「生活の基本」、「すべての産業の基本」、「経済の基盤」、「人類文化の基礎」、「総合的魅力」、「生きるよろこび」などの表現がみられる。(2) に属するものは、「人間と自然の接点」、「動物や植物との触れ合い」、「生きもの相手」、「自然と科学との調和をもたらすもの」などである。(3) に属するものは、「つくる楽しさ」、「未知性と共に将来性がある」、「おゝらか」、「健康的だ」、「のんびりしている」、「自由で自主的」、「労働時間の拘束がない」、「夢がある」などである。

消極的なイメージも又雑多なものであるが、全体として日本の農業を後進的で将来性のないものとしてとらえている。学生の記述例をあげると、「非合理」、「因襲的」、「進歩がおそい」、「不安定だ」、「将来性がない」、「日本に適さない」、「農民の意識水準が低い」、「重労働だ」、「肉体労働だ」、「激しく働らく割には収入が少ない」、「日本に必要なし」、「頭を使わなくてすむ」、「むつかしい」、「切りすてられる」などである。

以上に見るように、農学系学部の学生の大半は農業は大切であり、やり甲斐のある職業であると考えている一方、現実の日本農業の困難な状況を敏感にうけとめているといえよう。学生の記述の中には勿論誤解や明瞭なあやまりもあるが、われわれ教師は学生の農業に対するこのような意識状況を十分にわきまえ、彼等の農業に対する認識を正しく発展させる方向に導きうるような教育体系を組立ててゆかなくてはならない。

表5-6 学科別にみた学生の日本農業の将来性についての意識

日本農業の将来性	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農業経済学	水産学
発展してゆく	26%	21%	22%	30%	26%	20%	13%	28%
将来性がない	26	29	30	28	25	30	25	31
わからない	48	50	48	44	49	50	63	41
無回答	0	1	0	0	0	0	0	1
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

低い他は、いずれの学科の学生でも90%近くが日本で農業をやる必要性を認めている。日本の農業の将来性について最も悲観的なのは林学科、農芸化学科、獣医学科、農業経済学科の学生である。

全般的にみて学生の農業に対するイメージは上述のようなものであるが、自由に記述されたものの中にも農業と食糧問題、農業と農政との関係が強く指摘されている。そのいくつかを例示すると、「異常気象で将来食糧が不足する」、とか「食糧問題の解決が何よりも大切だ」、「農業は国のために大事な産業だから発展させる必要がある」、「使命感をもって農業をやるべきだ」、「産業としての農業にしなくてはならない」、「農業は農政と深い関係があり、日本の農業が発展するもしないも農政次第である」、「今の農政は農業をますます困難にしている、抜本的な転換が必要である」などと書かれている。こゝでも学生の多くが日本の農業の必要性を認識しながら、不安定で確信のない農政のために日本農業の健全な発展の可能性を危ぶんでいる。現在の日本農業に困難をもたらしている真の原因は何か、この困難を解決し日本の農業を健全に発展させる方途は何かを、教師と学生が共に考えてゆく重要性を農学教育の中に正しく位置づけなくてはならない。

5-3 農業の役割 農学系の学生が農業の役割をどうみているかを示したのが表5-7である。(回答に若干の重複があり合計は100%にならない)。農業の役割の内、関心の強い分野として伝統的な食糧の生産と供給をあげた者は、約半数の48%しかいず、公害の防止など自然環境の保

表5-7 農学系の学生が考える農業の役割

農業の役割	西日本			帯広大		
	家の職業			家の職業		
	農漁業	その他	合計	農漁業	その他	合計
食料の生産と供給	56%	46%	48%	79%	59%	63%
公害の防止など自然環境の保全	54	68	65	31	54	49
生活物資(煙草・木材・羊毛・香料など)の生産	11	9	9	3	12	10
その他	3	3	3	7	2	3
無回答	1	1	1	7	2	3

全をあげた者が65%に達した。家の職業が農業の者よりもその他の者の方が公害の防止など自然環境の保全に関心が強い。帯広大の学生はこれとは逆に、農業が食糧の生産と供給に果たす役割を高くかっている者が63%と多く、特に家の職業が農漁業の者では79%に達している。公害の防止な

ど自然環境の保全をあげた者は49%に止まっているが、家の職業が農漁業以外の者では54%になっている。

次に学科別の学生についてみると（表5—8），農業の食糧の生産と供給に果す役割を比較的低

表5—8 学科別の学生が考える農業の役割

農 業 の 役 割	農 学	林 学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	農 業 経 済 学	水産学
食料の生産と供給	54%	27%	52%	40%	55%	38%	49%	53%
公害の防止など自然環境の保全	59	76	65	66	56	67	64	62
生活物資（煙草・木材・羊毛・香料など）の生産	11	12	1	12	12	9	11	7
そ の 他	4	2	2	5	1	3	0	4
無 回 答	1	2	0	1	0	3	0	0

くみているのは林学科，獣医学科，農業工学科の学生であって，これら学科の学生の内，農業の役割を食糧の生産と供給としている者の率はそれぞれ27%，38%，40%である。林学科の学生では農業の役割の内，公害の防止など自然環境の保全に関心の強い者が76%と高率である。農芸化学科を除く全学科の学生で農業の役割の内関心の強いものとして生活物資の生産その他をあげている者が10～15%もある。これは既にみたように学生の卒業後に希望する職業が広範囲にわたっていることと対応している。農学教育の中で食糧の生産と供給の側面を第一に強調すべきことは勿論であるが，これらの学生の多面的な要求にみあった配慮が今後必要になってくると思われる。

6. 高等学校の農業科および水産科出身者の意識

既にのべた様に農学系学部の入学者中に占める高等学校の農業科および水産科出身者の割合は非常に低い。高校においてこれらの課程を履修したものは一定の専門的知識と技術の修得がおこなわれている筈であり，このことが学生の進学動機および農業に対する意識に与える影響をするために以下の調査検討を行った。

6—1 学生の入学動機 学生が入学前に第一志望としていた学部をみると（表6—1），農業

表6—1 学生が入学前に第1志望とした学部

第一志望の学部	農 業 科	水 産 科
農 林 学 系	48%	0%
水 産 学	0	60
理 学（生物系）	9	13
理 学（生物系以外）	4	7
獣 医 学	13	7
商 船	0	13
教 育 学	4	0
そ の 他	13	0
無 回 答	9	0
合 計	100%	100%

表6—2 学生が現在の専攻を選んだ理由

現在の専攻を選んだ理由	農 業 科	水 産 科
農業がすき	74%	0%
水産業がすき	0	60
生物がすき	9	33
自然がすき	0	7
先生や親のすすめ	17	20
先輩・知人がいた	9	0
通学に都合がよい	13	7
入学しやすい	9	7
二次志望で廻された	4	0
そ の 他	4	7

科の出身者では農林学系志望が48%と高く、獣医学の13%と理学部（生物系）の9%がこれに次いでいる。普通科の出身者と較べて農学への志向性が強い。一方水産科の出身者では水産学志望が60%と高く、これに理学部（生物系）の13%、商船の13%が続く。こゝでも普通科の出身者よりも専攻への高い志向性が認められた。

学生が現在の専攻を選んだ理由をみると（表6-2）、農業科出身者の74%が「農業がすき」だからと回答し、「先生や親のすすめ」が17%、「通学に都合がよい」が13%とつく。「入学しやすい」、「第二志望である」とした者は合計13%しかいず、普通科の出身者とは可成り違っている。水産科の出身者では「水産業がすき」の33%、「先生や親のすすめ」の20%がこれにつく。このように農業科および水産科の出身者はそれぞれ農業と水産業への志向が強いのが特長的である。

次に学生の卒業後の進路希望を示したのが表6-3である。農業科の出身者は61%が農林業関係が志望と答え、公務員の20%がこれにつく。水産科の出身者では漁業関係の志望が47%を占め、食品の製造加工の20%、研究の13%がこれにつく。このように卒業後の進路希望についても普通科の出身者とくらべて農林業関係および漁業関係が非常に多い。

6-2 学生の農業に関する意識 学生の農業に対するイメージを表6-4に示した。農業科の出身者では農業を「大切だ」とする者が61%、「やり甲斐がある」とする者が48%の高率を示し、一方「大学を出なくてもやれる」とする者が17%、「つらい」とする者が13%もある。水産科の出身者では農業を「大切だ」とする者が80%もあるが、農業に対するイメージはとくにないとする者が20%もある。

日本で農業をやる必要性の有無については（表6-5）農業科の出身者の96%がその必要性を認めている。水産科の出身者では日本の農業の必要性を認めている者が73%、わからないとする者が27%である。水産科の出身者は普通科の出身者よりも日本の農業に対して幾分懐疑的であると思われる。

日本の農業の将来性については（表6-6）、農業科の出身者の57%が発展してゆくと考えているが、「将来性がない」とする者と「わからない」とする者の和が43%にもなる。普通科の出身者にくらべて日本の農業が発展してゆくと考えている者の割合がかなり高いが、こゝでも日本での農業をやる必要性を認めながら、その将来に不安をもっていることが表明されている。水産科の出身

表6-3 学生の卒業後の進路希望

進路希望	農業科	水産学
農林業関係	61%	0%
漁業関係	0	47
食品の製造加工	4	20
公務員	20	0
教員	4	7
研究	4	13
その他	4	7
わからない	4	7
合計	100%	100%

表6-4 学生の農業に対するイメージ

農業に対するイメージ	農業科	水産科
大切だ	61%	80%
やり甲斐がある	48	7
大学を出なくてもやれる	17	0
つらい	13	7
とくにない	9	20

表6-5 日本で農業をやる必要性

日本農業の必要性	農業科	水産科
日本で農業をやる必要がある	96%	73%
日本で農業をやる必要がない	0	0
わからない	4	27
合計	100%	100%

表6-6 日本農業の将来性

日本農業の将来性	農業科	水産科
発展してゆく	57%	33%
将来性がない	17	33
わからない	26	33
合計	100%	100%

者では、日本の農業を「発展してゆく」とする者、「将来性がない」とする者、「わからない」とする者がいずれも多くなっている。

学生が農業の役割をどの様にみているかをみると（表6—7）、農業科の出身者では食糧の生産と供給に関心の強い者が61%、公害の防止など自然環境の保全に関心の強い者が39%である。水産科の出身者では関心の強い分野として「食糧の生産と供給」をあげた者が73%、「公害の防止など自然環境の保全」の役割をあげた者が40%である。普通科の出身者とくらべていずれも、伝統的な農業の役割である食糧の生産と供給を重視していることがわかる。

表6—7 学生の考える農業の役割

農 業 の 役 割	農業科	水産科
食料の生産と供給	61%	73%
公害の防止など自然環境の保全	39	40
生活物資（煙草・木材・羊毛・香料など）の生産	9	13
そ の 他	9	0
無 回 答	0	7

ま と め 以上主として西日本地域の農学系大学、学部の新生を対象にして、学生の入学動機と農業に関する意識を調査、検討してきた。そこでみられたものは多くの学生が農業は大切だ、日本で農業をやる必要があるとしながらも、日本の農業の現実と将来に対する悲観的、懐疑的な姿である。その程度は学生の出身地域と大学、出身家庭の職業、所属学科などによって若干の違いがあるが、この傾向はすべてに共通している。

この調査を行った昭和48年4月～5月はどのような時点だったであろうか。アメリカが大豆の輸出規制をおこない、大手商社のもち米・大豆の買占めが問題となっていた。西アフリカの旱魃による飢餓線上の数百万人の様子が連日新聞紙上を賑わしていた。政府もやっと減反政策の再検討を始め、国家の存立に影響を与えかねない程に低下している食糧の自給率などが漸く世人の話題になり始めていた。一方、資本主義の下での無秩序な経済の高度成長の結果は、工場や都市の排出物・廃棄物による大気や土壌・河川・海洋などの著るしい汚染をもたらし、多くの公害病の発生にみられるように人間の生存自体をも脅かしかねない状態になっている。農産物や畜産物、水産物などのカドミウムや水銀、PCBなどによる汚染、各種の有害食品添加物などの問題は、「食品公害」という形で重大な社会問題となっている。

これらの問題の多くは主として農学系学部の担当すべき分野である。始めにのべたようにわれわれ教師は、大学の教育が真の社会的要請に正しく応えているかどうかを常に念頭において教育を行なわなくてはならない。この調査でみられた学生の意識は一般社会の状況の一定の反映である。学生の意識の中に上にのべたような状況が強く反映しているとみてよかろう。われわれ農学系学部の教師はこれらの重要で緊急な諸問題を正しく、効果的に解決できる人材を養成できるような教育組織とカリキュラムを編成しなくてはならない。

この調査では農業というものを始めから定義しておかなかった。そのことがこの調査の大きな欠陥であり、農業というものがさまざまな形で理解されていることが学生の回答からうかがわれた。しかし一方そのことが逆に農業あるいは農学というものを考えるきっかけを学生に与えたようにも

思う。農業と農学の内容は時代と共に変る。日本の農業をどう考えたらよいのか、どういう形で発展させるべきなのか、農学はどうあるべきなのかを教師も学生も一緒になって考えてゆかなくてはなるまい。そのことによって始めて農学系学部が、すぐれた専門の学問と技術を身につけ、真の社会的要請に応えうる卒業生を社会に送り出すことができるようになり、農学系学部の社会的な存在価値を一段と高めることができると思う。

農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究

— 普通高校生との比較 —

— 普通高校生との比較 —

A Survey of the consciousness of Agricultural Upper Secondary School Students on their Career Selection and Agriculture : A Comparative Study with General Upper Secondary School Students.

山 谷 洋 二 *

1. はじめに

著者は昨年、西日本地域の農学系大学・学部の新入学生を対象にして、大学への入学動機と農業に関する意識の調査を行った。そこで明らかになった事は、農学系学部の学生の大多数が農業は大切であると考えながらも、日本の農業の現状と将来に対して大きな不安をもっている姿である。このことは更に、農学系学部の新入学生の過半数が、農学系学部を入学の第一志望としていなかったこと、大学卒業後の進路に農業関係以外のものを志望している者の少なくないことに示され、学生の大学での勉学意欲に大きな影響を与えている。勿論その真の原因は前報でも述べたように昭和30年代後半からの高度経済成長の中での工業偏重・農業軽視政策にあると考えられるが、高等学校での教育のあり方が、生徒の大学・学部への進路選択や農業に関する意識に大きな影響を与えているものと思われる。

そこで今回は高等学校の生徒を対象にして、卒業後の進路選択の状況と農業に関する意識の調査検討を行った。前回の大学生についての調査のさい、農学系の学部に高等学校の農業科からの進学者の少ないこと、農業科からの進学者と普通科からの進学者との間に農業に関する意識に若干の相違が認められたので、今回は農業と直接関係のある農業高校生を中心に、普通高校生を対照にしながら、卒業後の進路選択の状況と農業に関する意識を調査検討したので以下に報告する。

本調査の実施にあたって、調査対象高校の諸先生と生徒諸君に一方ならぬお世話になった。この機会に深く感謝の意を表します。最後にこの調査・研究は広島大学・大学教育研究センターの「理科系学部学生のための一般教育および基礎教育に関する研究」プロジェクトの一環として行なったものである。センターの諸先生より多くの御教示や助言をいただいた。心から感謝します。

2. 調査の方法

調査の実施時期は昭和49年4月下旬である。調査対象校として、歴史も古く、広島県下一円を学区としているA農業高校をえらび、三年生の全員に対して別掲の調査票を用いてアンケート調査を行なった。別に普通高校として広島県東部学区の進学校であるB高校をえらび同様のアンケート調査を行なって対照とした。調査票の回収率は表2-1の如く、A農業高では93%、B普通高では92%であった。

表2-1 調査票の回収率

	生徒数	回収数	回収率
A 農業高	233人	217枚	93%
B 普通高	400	369	92

※ 広島大学水畜産学部・広島大学大学教育研究センター併任研究員

A農業高は園芸科，畜産科，食品製造科，農業土木科，造園科，生活科，農業機械科の7つの小課程から構成されており，B普通高は普通課程のみである。生徒の性別の構成は（表2-2），A農業高では男性約8割，女性約2割であるのに対して，B普通高では男性約6割，女性約4割である。

生徒の家の職業別の構成をみると（表2-3）
A農業高では兼業を含む農林漁業が58%，それに農林漁業関連の職業の者12%を含めると70%に達する。一方B普通高では農林漁業が19%，これに農林漁業関連のもの10%を含めても29%と少ない。

表2-2 生徒の性別構成

	A 農業高		B 普通高	
男性	172人	79%	231人	63%
女性	45	21	138	37
合計	217人	100%	369人	100%

表2-3 生徒の家の職業別構成

家の職業	A 農業高		B 普通高	
農林漁業（兼業を含む）	126人	58%	71人	19%
農林漁業関係の行政・教育・農協・研究・会社など	25	12	28	8
食品製造関係	1	0	7	2
その他	51	24	245	66
無回答	14	6	18	5
合計	233人	100%	400人	100%

生徒の高校の種別ならびに家の職業別に調査結果の分析・検討を行なった。

調査票：高校生卒業後の進路決定と農業に関する意識調査

広島大学・大学教育研究センター

昭和49年4月

この調査は、高校生諸君の卒業後の進路決定の状況と、農業に関する意識をしらべて、大学入学当初の学生（特に農学系学生）の教育の改善に役立てるために行なうものです。調査の結果は、この目的以外に利用することはありませんから、正直にありのままを回答して下さい。

諸君のご協力をおねがいます。

回答の仕方：特別の指示のない限り、最も適当と思う事項の数字を一つ選んで○でかこみ（例②），（ ）の中には必要な事項を記入して下さい。

問1 1. 男性 2. 女性

問2 あなたの家の職業は何ですか。

1. 農林漁業（兼業を含む）

2. 農業関係の行政・教育・農協・会社（農機具・肥料・飼料）などに勤務

3. 食品製造関係

4. その他（ ）

- 問3 あなたは現在の高校生活に満足していますか、それとも不満ですか。
1. 満足 2. 不満 3. どちらともいえない
- 問4 高校生活に不満な理由は何ですか。(前の問に不満と答えた人のみ。2つ以上選んでも良い)
1. 授業の内容が低すぎる 2. 授業の内容が高すぎる 3. 生徒が多すぎる
4. 図書館などの設備が不十分である 5. 良い先生が少ない
6. その他()
- 問5 あなたは大学へ進学する希望がありますか
1. ある 2. ない 3. わからない
- 問6 大学へ進学しない理由は何ですか。(大学へ進学しない人のみ)
()
- 問7 あなたの第一志望の大学・学部はどれですか。(進学希望の人のみ)
1. 農学系の学部(農・林・水産・獣医・農芸化学・農業土木など)
2. その他() 3. 未定
- 問8 その学部を志望する理由は何ですか。(進学希望の人のみ)
()
- 問9 あなたの大学へ進学する目的は何ですか。(進学希望の人のみ。2つ以上選んでもよい)
1. 専門的な学問や技術を身につける 2. 教養を高め人間的に成長する
3. 教師や友人との人間的な接触を深める 4. サークルやクラブの活動をする
5. 青春を楽しく過ごす 6. 就職の条件をよくする
7. 皆が大学に行くから 8. その他()
- 問10 あなたは将来どんな職業につくことを希望していますか。
1. 農林漁業に従事したい
2. 農林漁業関係の行政・教育・農協・研究・会社などに就職したい
3. 食品製造関係 4. その他()
- 問11 農業についてどういうイメージをもっていますか。(2つ以上選んでもよい)
1. やり甲斐がある 2. 大切だ 3. つらい
4. 大学を出なくてもやれる 5. 自然との触れあい 6. 働く割に収入が少ない
7. 農業政策と関連が深い 8. その他() 9. とくにない
- 問12 日本の農業の将来についてどう考えますか。
1. 日本で農業をやる必要がない 2. 日本の農業の将来性はない
3. 日本の農業は発展しなければならない 4. わからない
5. その他()
- 問13 農林業や水産業の役割のうちあなたの関心の最も強い分野を1つえらんで下さい。
1. 食料の生産と供給 2. 公害の防止など自然環境の保全
3. 生活物資(煙草・木材・羊毛など)の生産 4. その他()

以上です。どうも有難うございました。

3. 高校生活

生徒が現在の高校生活に満足しているかどうかを示したのが表3-1である。高校生活に満足している者はA農業高では4%、B普通高でも8%と非常に少なく、不満な者はA農業高では45%、B普通高では29%となり、A農業高で若干高い数値を示しているがいずれも高率である。「どちらともいえない」とする者が両高校とも過半数を占める。

表3-1 現在の高校生活に対する満足度

高校生活	A農業高	B普通高
満足	4%	8%
不満	45	29
どちらともいえない	51	61
無回答	0	2
合計	100%	100%

「人間関係（先生と生徒、先徒間）が冷たい」とするものが3%、「農業高校という名前が嫌いだ」と書いている学生もあった。

一方、B普通高では「生徒が多すぎる」と、「良い先生のいないこと」を現在の高校生活に不満である理由とする者が同率の29%あり、次いで「授業内容の高すぎる」ことを理由とする者が17%ある。その他の理由をあげた者は50%あり、その内「授業内容が多すぎて勉強に追われて自由に使える時間がない」ことを理由とする者が11%、「受験中心で大学の予備校化している」とする者が7%、「人間関係が冷たい」とする者が6%ある。その他、「個性が画一化され創造性が破壊される」、「教養関係の科目が少ない」、「生徒の一部の能力しか評価しない」などの不満が記述された。

以上にみられるようにA農業高では授業の内容の低さと生徒の劣等感が高校生活を不満とする主な原因となっており、B普通高では受験中心の人間性無視に不満が集中している。多くの高校生に上述のような「灰色の高校生活」を送らせている根本の原因は何なのだろうか。

周知のように戦後の新制高校は、戦前の複線型教育体系を廃止して、総合制、小学区制、男女共学制の三原則を教育課程の柱として発足した。しかし高校進学率の向上に伴ってひとりひとりの能力・適性に応じた教育という名目で上記の三原則は大きくくずされ、大学進学中心の普通高校と、中堅技能労働者養成のための職業高校に二分された。これは高度経済成長政策の中で小数のエリートとしてのハイタレントと大多数の体制順応型の技能労働者養成を目指す資本の要請にみあったものであった。こういう中で、普通高校の生徒は大学入試中心の疎外された高校生活をよぎなくされ社会的現実への関心もうすい。一方職業高校の生徒は中堅技術者養成という性格のあいまいな教育目標の下で一般教育科目軽視のカリキュラムを押しつけられ、自信喪失と無気力におちいつているのである。

次に、これらの高校生が現在の高校生活に対してもつ不満の理由を示したのが表3-2である。高校の種別により不満の理由に大きな違いが認められた。A農業高では「良い先生のいないこと」（勿論生徒のいう良い先生とは何であるか問題であるが）を理由とする者が50%を占め、次に「授業内容の低すぎる」ことを理由にあげる者が24%いる。その他の理由をあげた者が33%あり、その内で「学校が面白くない」とする者が6%である。

表3-2 現在の高校生活に不満の理由

高校生活に不満の理由	A農業高	B普通高
授業の内容が低すぎる	24%	3%
授業の内容が高すぎる	6	17
生徒が多すぎる	10	29
図書館などの設備が不十分	6	5
良い先生のいない	50	29
その他	33	50
(内) 人間関係が冷たい	3	6
学校が面白くない	7	0
生徒の質がよくない	6	0
受験・予備校化している	0	7
授業が多すぎる	0	11
無回答	2	10

4. 大学への進学

大学への進学希望の有無を示したのが表4-1である。
 A農業高では進学希望者が34%であるのに対して、B普通高では殆んど全員が大学進学を希望している。A農業高の生徒で進学を希望しない理由として記述された主なものを以下に示すと、

- (1)目的がないのに進学しても意味がない。何のために大学に行くのかわからない。大学は自分のためにならない。
- (2)早めに社会に出て働きたい。自分の好きなことをしたい。

- (3)大学を出なくても農業はできる。農業をするのに学歴は不要。
- (4)家庭の事情、家が農業なのであとをつぐ。
- (5)学力不足。能力がなく自信がない。勉強したくない。

このように生徒の中に存在する大学に対する負のイメージが、大学進学を希望しない理由の一部と考えられるが、次に示すA農業高校のカリキュラムの例にみられるように(表4-2)、現在の教育課程では、専門教科や実習が多すぎて、農業高校からの大学進学は非常に困難であると思われる。職業高校の単独化は課程の細分化(小学科制)をもたらし、理科、数学、英語などの教科にA・B格差を持ち込むなど程度を下げた多様化を招来し、大学進学希望者(このアンケートでは34%)

表4-1 大学への進学希望

進学希望	A農業高	B普通高
あ る	34%	97%
な い	40	0
わからない	26	2
無回答	0	1
合 計	100%	100%

表4-2 A農業高校のカリキュラムの一部

学科・学年 教科・科目		畜 産 科					食 品 製 造 科					農 業 土 木 科					
		1	2	3	計	合計	1	2	3	計	合計	1	2	3	計	合計	
一 般 教 科	国語	現代国語	3	2	2	7	9	3	2	2	7	9	3	2	2	7	9
		古典 I 甲			2	2				2	2				2	2	
	社 会	倫理・社会		2		2			2		2			2		2	
		政治・経済			2	2	10			2	2	10			2	2	10
	数 学	日本史		3		3				3	3				3	3	
		地理 B	3			3		3			3		3			3	
	理 科	数学 I	6			6	6~10	6			6	6~10	6			6	6~10
		数学 II A		4	1	4	10		4	1	4	10		4	1	4	10
	保 健 体 育	物理 I			3	3			3		3	9		3		3	
		化学 I		3		3		3			3	9	3			3	
		化学 II					9		2	1	2	11					8
	芸 術	生物 I	3			3		3			3		2			2	
		地学 I															
	外 国 語	保健体育	2	2	3	7	9	2	2	3	7	9	2	2	3	7	9
		音楽 I	1	1		2		1	1		2		1	1		2	
音楽 II																	
美術 I		2			2	2	2			2	2	2			2	2	
小 計	美術 II																
	書道 I																
外国語	英語 A	3	3	3	9	9	3	3	3	9	9	3	3	3	9	9	
小 計		23	16~20	15	54~58	54~58	26	15~17	12~15	53~58	53~58	25	17	15	57	57	

学科・学年 教科・科目		畜産科					食品製造科					農業土木科					
		1	2	3	計	合計	1	2	3	計	合計	1	2	3	計	合計	
専 門 教 科	農 業	畜産	3	3	3	9											
		土・肥料		2		2											
		農業機械			2	2											
		農業経営	2	2	2	4~6											
		家畜栄養飼料			2	2											
		家畜衛生		2	2	4											
		飼料作物	3	2		5											
		農業施設		2		2											
		食品製造						2	3	2	7						
		食品製造衛生								2	2						
	農畜産加工			3	3												
	応用微生物							2	3	5							
	食品化学					45	3	3	4	10	44					45	
	製造機器							2	2	4							
	食品製造経営							2		2							
	園芸		2		2			2		2							
	測量											4	4		8		
	環境衛生			2	2												
	応用力学											2	2		4		
	農業土木設計												2	5	7		
	材料施工												2	4	6		
水理												4		4			
農業水利													3	3			
農地開発													2	2			
小動物			2	2													
土・土質														2	2		
総合実習	4	4	4	12		4	4	4	12		4	4	4	12			
工業 電気一般							2		2	5							
商業 醸造工業								3	3								
商業 計算実務								3	3	6							
小計		12	15~19	20	47~51	47~51	10	17	19~22	46~49	46~49	10	18	20	48	48	
特別教育活動		1	1	1	3	3	1	1	1	3	3	1	1	1	3	3	
全教科合計		36	36	36	108	108	36	36	36	108	108	36	36	36	108	108	

に挫折感を与えている。大学の農学系学部入学生の中に高校の農業科および、水産科出身者の少ないのも当然である。中堅技能者養成という教育目標からみても、細分化された単科の職業教育では急速に発展する技術革新に対応する技術教育も不可能である。一般基礎的な学力をつける方向の教育が重視されなくてはならない。

高校生が大学へ進学する目的をみると（表4-3）、A農業高では「専門的な学問や技術を身に

表4-3 大学へ進学する目的

大学へ進学する目的	A農業高 B普通高		大学へ進学する目的	A農業高 B普通高	
	A	B		A	B
専門的な学問や技術を身につける	65%	61%	就職の条件をよくする	25	22
教養を高め人間的に成長する	30	36	皆が大学に行くから	6	11
教師や友人との人間的な接触を深める	15	24	その他	3	4
サークルやクラブの活動をする	11	16	無回答	1	6
青春を楽しく過ごす	41	29			

つける」ためとする者が最も多く65%を占め、次いで「青春を楽しくすごす」の41%、「教養を高め人間的に成長する」の30%、「就職の条件をよくする」の25%がつづく。B普通高でも大体傾向は同じで「専門的な学問や技術を身につける」ためとする者が一番多く61%を占め、次いで「教養を高め人間的に成長する」が36%、「青春を楽しくすごす」が29%、「教師や友人との人間的な接触を深める」が24%、「就職の条件をよくする」が22%となっている。

次に生徒の進学希望の学部をみると(表4-4)、A農業高では56%が農学系の学部を希望し、特に家の職業が農林漁業の者では60%が農学系の学部を志望している。一方B普通高では家の職業にかかわらず農学系の学部を志望する者は殆どいない。

表4-4 進学を希望する学部

生徒の家の職業	A 農業高				B 普通高			
	農林漁業	関連産業	その他	全体	農林漁業	関連産業	その他	全体
農学系の学部	60%	50%	48%	56%	3%	6%	2%	3%
その他の学部	20	17	29	22	45	66	55	53
未定	20	33	24	21	44	23	35	36
無回答	0	0	0	1	7	6	7	8
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

A農業高で農学系の学部へ進学を希望する者の志望学科をみると、現在の職業課程の延長として同種の学科を志望する者と、農学系の学部の中ではあるが、現在の課程とは別の関係のある学科を志望する者がある。志望の動機としては次のものがあげられた。

- (1) 自分の性格にあっている。おもしろい。動物がすき。
- (2) 家の職業をつぐため。
- (3) 現在の専門をずっと続け生かしたい。今の専門の学力を伸ばしたい。
- (4) 農業には夢と希望がある。将来性がある。

B普通高で農学系の学部への進学を希望する者の主な志望理由は次のようなものである。

- (1) 農業は自分に向いている。自分を生かせるやり甲斐のある職業である。
- (2) 平凡なサラリーマンになりたくない。
- (3) 家の職業をつぐ。
- (4) 農業こそ人間にとって一番自然のもの。人間らしさにあふれる職業である。
- (5) 農業は将来性がある。
- (6) 生物と自然に関心がある。生物と自然の中で暮したい。自然界の事を勉強してみたい。

5. 卒業後の進路

生徒の卒業後の進路希望を示したのが表5-1である。A農業高では農林漁業に従事することを希望する者は12%、食品製造を含めた農林漁業関連の仕事希望する者が29%あり、約6割の生徒は農業関係以外を希望するか、態度未定である。生徒の家の職業別にみると、家が農林漁業の者でも農業関係以外の職業を希望する者が34%と多く、農林漁業関連の仕事が28%、農林漁業に従事することを希望する者は13%にすぎない。農業関連の仕事をしている家の者では過半数の54%が農業関

連の仕事を希望している。農業に関係のない家の者は6割が農業関係以外の職を希望している。A農業高校の最近2ヶ年間の卒業生の進路状況(表5-2)をみても、約3割の大学などへの進学者

表5-1 卒業後の進路希望

家の職業 卒業後の進路希望	A 農業高				B 普通高			
	農林漁業	関連産業	その他	全体	農林漁業	関連産業	その他	全体
農林漁業に従事したい	13%	0%	12%	12%	4%	0%	1%	2%
農林漁業関係の行政・教育・農協・研究・会社など	28	54	8	24	8	31	4	7
食品製造関係	6	8	0	5	0	0	0	0
その他	34	12	61	38	45	40	68	58
わからない	6	8	10	6	10	11	12	11
無回答	13	19	10	14	32	17	15	22
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表5-2 A農業高校卒業生の進路状況(人)

年 度	進 学				就 職													そ の 計		
	大 学	短 大	各 種 学 校	訓 練 校 等	農 林 水 産 業	建 設 業	食 品 製 造 業	木 材 製 造 業 ・ 家 具 ・ パ ル プ 製 造 業 ・ 出 版 業	織 維 ・ 化 学 ・ 窯 業	鉄 鋼 ・ 金 属 製 造 業	機 械 (輸 出 機 械 も 含 む)	電 機 機 械 器 具 業	製 造 業	卸 ・ 小 売 業	金 融 ・ 保 険 ・ 業	不 動 産 業	運 輸 ・ 通 信 ・ 電 気		ガ ス ・ 電 気	サ ー ビ ス 業
46	24	16	17	3	6	19	25	5	6	8	42		37	1	2	22	27	7	267	
47	30	34	18	4	11	11	12	18	7	38	15	7	15	1	1	9	19	6	256	

を除けば、農林水産業(訓練校などを含む)に約5%、食品製造業に約7%が進んでいるだけである。高校生の大学進学率の向上に伴って、農業高校でも大学進学希望者が増加の傾向にあるし、生徒の中広い進路希望に応じた柔軟性のある教育課程の編成が望ましいと思われる。一方、B普通高では農林漁業に従事を希望する者と農林漁業関連の仕事を希望する者を合計しても1割に満たない。普通高校の生徒は自分の家の職業が農業関係であるなしにかかわらず農業志向性は極端に低いと考えられる。

6. 農業に関する意識

生徒の農業に対するイメージを示したのが表6-1である。A農業高では農業を「大切だ」とする者が約半数の47%あり、次いで「働くわりに収入が少ない」とする者が39%、「つらい」とする者が34%、「自然とのふれあい」を感じるとする者が26%あり、「農業は大学を出なくてもやれる」とする者が15%ある。農業政策との関連を考える者が8%である。家の職業別にみると、農林漁業の出身者は約半数の49%が「働くわりに収入が少ない」、48%が「大切だ」、37%が「つらい」

の農業は発展しなければならない」とする者が過半数の56%を占め、「将来性はない」とする者は19%であって、「日本農業の必要はない」とする者は2%と非常に少ない。20%の者が「わからない」としている。家の職業別にみると、農林漁業の出身者は60%が日本の農業の発展を希っており、農業関連職業の出身者では日本の農業の将来に悲観的なものが幾分多い。

B普通高でも大体同じ傾向であり、日本の農業の発展を望む者が62%と高く、日本農業の将来性がないとする者は16%、日本農業の必要性を認めない者は1%と非常に少ない。

その他日本の農業の将来性に関して記述された主なものを示すと下の通りである。

- (1) 食糧危機が必ずくる。食糧の生産に本気で取組まないと将来が危ぶない。
- (2) 日本人の食糧は日本で生産する必要がある。すべてを輸入するのはだめだ。
- (3) このまゝでは日本の農業の将来性はない。本気で農業の再開と取り組まなくてはならない。
- (4) 日本農業の将来は政府の農政次第である。政府はもっと農業に力を入れるべきである。
- (5) 酪農をかねた合理的農業や、農薬を使わない自然農業が必要である。

次に生徒が農業の役割をどうみているかを示したのが表6-3である。A農業高では、農業の役割を伝統的な食糧の生産と供給とみている者は36%で、公害の防止など自然環境の保全の役割を重視している者の方が39%で多い。家の職業別では矢張り農林漁業の出身者は食糧の生産と供給の役割を重視している者が比較的多く43%を占める。農業と関係のない職業の者では、公害など自然環境の保全の役割を重視するものが約半数の49%を占める。

一方、B普通高では食糧の生産と供給の役割を重視する者が45%と多く、公害の防止など自然環境の保全の役割を重視する者は35%である。家の職業別にみると、農林漁業の出身者では食糧の生

表6-3 農業の役割

農業の役割	A 農業高				B 普通高			
	農林漁業	関連産業	その他	全体	農林漁業	関連産業	その他	全体
食料の生産と供給	43%	27%	35%	36%	56%	43%	42%	45%
公害の防止など自然環境の保全	37	38	49	39	27	41	37	35
生活物資（煙草・木材・羊毛など）の生産	10	19	20	15	8	8	10	10
その他	6	4	8	6	3	3	4	3
無回答	4	12	2	5	7	5	6	7
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

産と供給の役割を重視する者が56%と高い率を占める。

7. ま と め

以上農業高校生を中心に農業に関する意識を調査・検討して来たが、こゝでも前報の農学系学部の大學生にみられたと同様に、農業は大切だ、日本で農業をやる必要があるとしながらも、日本の農業の現実と将来に対する悲観的・懐疑的な姿がにじみ出ている。高校生の意識がそのまゝ大學生に反映しているのである。今年は昨年の事態に更に石油危機が重なって世界的な資源問題が吾々の前に大きく立ちはだかっている。

高校生や大學生の農業に対する意識をこれ程までに消極的にしているものは何か。彼等は農政の

歪んだあり方を鋭く指摘している。日本人の生命の根源である食糧を生産する農業を重んずる政治をこそ彼等は望んでいるのである。そういう政治が実現されて始めて農業高校の教育も大学の農学系学部の教育も正しく実りのあるものになるであろう。

農業高校の教育についていえば、多すぎる職業専門科目をへらし、一般教育科目を重視するよう
にすべきである。生徒はますます細分化された専門科目のはざまに、青年らしい創造性や知的研究
心を枯らせられて了っている。事実上大学進学を不可能にしている現在のカリキュラムを改革する
必要がある。普通高校の教育については現在の大学入試のあり方を大きく改善することなしには、
正常な教育内容を期待できないが、生徒ひとりひとりの自主性を伸ばし、労働を重んじ、社会的現
実を直視し、人間が本当に尊重される社会の建設に進んで参加し、貢献できる人間を育成する方向
の教育へと改革してゆかなくてはならない。

大学研究ノート 通巻15号

1974年6月発行

広島大学大学教育研究センター

730 広島市東千田町1丁目1-89

TEL (0822)41-1221

大学研究ノート・バックナンバー

- 第1号 (1971.8) サセックス大学のカリキュラム：自然科学系 ハンドブック1966-67より
..... 大学問題調査室〔編訳〕 (残部無)
- 第2号 (1971.9) 高等教育に関する主要外国雑誌目録, 1971
..... 近藤春生 (残部無)
- 第3号 (1971.10) ドイツの大学におけるInstitute 数及び教授数に関する集計
..... 岩村 聡〔編〕 (残部無)
- 第4号 (1972.7) 欧米の医学カリキュラム 杉原芳夫〔編訳〕 (残部少)
- 第5号 (1972.8) アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料
..... 関正夫・川上昭吾〔編訳〕 (残部無)
- 第6号 (1973.2) サセックス大学のカリキュラム：人文・社会系 ハンドブック1966-67より
..... 大学教育研究センター〔編訳〕 (残部無)
- 第7号 (1973.3) 諸大学学寮規程・規則集 大学教育研究センター〔編〕 (残部無)
- 第8号 (1973.8) ドイツの大学改革と学生生活の現況 マールブルク大学を中心として
..... 千代田 寛・阪口 修平 (残部無)
- 第9号 (1973.9) 広島大学医学部紛争における医局・講座, 大学院および学位制度問題資料
..... 杉原芳夫〔編〕 (残部有)
- 第10号 (1974.7) 理学部生物学科の調査—カリキュラムを中心に
..... 川上昭吾 (残部無)
- 第11号 (1974.2) 大学院・研究体制に関する文献目録
..... 喜多村 和之〔編〕 (残部有)
- 第12号 (1974.2) 大学院・学位に関する規程集
..... 喜多村 和之〔編〕 (残部有)
- 第13号 (1974.3) アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育
..... 関正夫〔編訳〕 (残部少)
- 第14号 (1974.3) 諸大学学寮規程・規則集 大学教育研究センター〔編〕 (残部有)

Notes on Higher Education

No. 15 June, 1974

A Survey on the Freshmen's Consciousness of Agricultural courses in Colleges and Universities Concerning their Entrance Motive and an Image of Agriculture

A Survey of the Consciousness of Agricultural Upper Secondary School Students on their Career Selection and Agriculture : A Comparative Study with General Upper Secondary School Students .

..... Yoji Yamatani

RESEARCH INSTITUTE
FOR
HIGHER EDUCATION
Hiroshima University
Hiroshima Japan